

己おのれを諂人とうじんと謂いわば、則すなわち勃然ぼつぜんとして色いろを作なし、己おのれを諛人ゆじんと謂いわば、則すなわち怫然ふつぜんとして色いろを作なす。而しかも身みを終おうるまで諂人とうじんなり、
諛人ゆじんなり。譬たとえを合あわせ辞ことばを飾かざりて衆しゅうを聚あつむるも、是これ終始しゅうし
本末ほんまつ、相あい坐ざせず。衣裳いしやうを垂たれ、采色さいしよくを設もうけ、容貌ようぼうを動うごかして、
以もつて一世いっせに媚こびながら、而しかも自みずからは諂諛とうゆと謂おもわず、夫かの人ひとと徒と
為なりて、是非ぜひを通つうじながら、而しかも自みずからは衆人しゅうじんと謂おもわず。愚ぐの至いた
りなり。其その愚ぐを知る者しものは大愚たいぐに非あらざるなり。その惑わくを知る者しものは
大惑たいわくに非あらざるなり。大惑たいわくなるものは終身解しゅうしんらず、大愚たいぐなる者は
終身靈しゅうしんならず。

【大体の意味内容】

自分じぶんのことをお追従者ついしやうものだと言いわれるとむっとして気色けしきばむ者がいる。自分じぶんのことをご機嫌きげん
取りだと言いわれるとかつとなつて真まつ赤かになる者ものもいる。このような者ものは、所詮死しよせんぬまで
お追従者ついしやうものであり、ご機嫌取りきげんとで終わる。うまい譬たとえ話ばなしをしたり、美辞麗句びじれいくを飾かざり立てて、
大衆たいしゅうの人氣にんきを集めるようなお追従者ついしやうものほど、かえつてお追従者ついしやうものとは非難ひなんされないので謎なぞで
ある。立派な服りっぱで着飾ふくったり、容貌ようぼうを取り繕つくろつて世よの中に媚なび諂へつらいながら、自分じぶんではお
追従者ついしやうものとは思おもっていない。またそのような者ものと仲間なになつて、あれは良よいとかこれはダメ
だとか、自分じぶんの意見いけんを持もたずに周まわりに合あわせるばかりなのに、自分じぶんでは大衆たいしゅうの一部いちぶとは思おも
わない。まったくもつて愚かおろの極きわみである。自分じぶんの愚かおろさを知しっている者ものならば、決けつして
大愚たいぐにはならない。自分じぶんが惑まどっていると自覺じかくする者は、決けつして大惑たいわくにはならない。大惑たいわくの

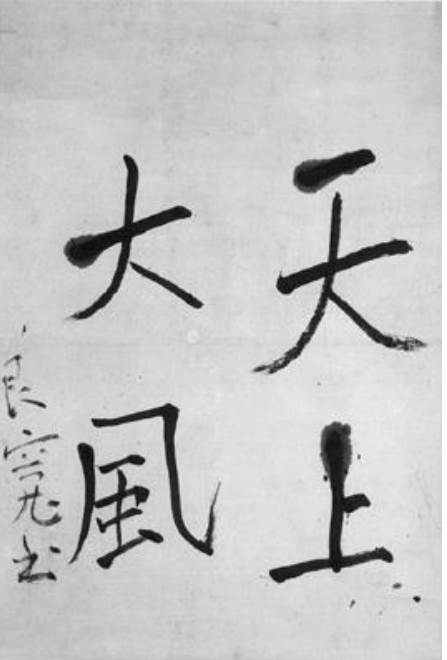
ものは、一生自分の不様さを悟ることができない。大愚の者は、死ぬまで無知蒙昧で、物事の真理本質を明らかにできない。

江戸時代に越後国（新潟県）に生まれた禅僧で良寛という人がいます。「名主」という、村長の家柄なのでそれなりに裕福だったのですが、天災・凶作・飢饉や疫病（ウィルス）などの不幸に見舞われるこの世の無常を憐んで仏門に入ったと言われています。長年の修行・放浪を経て、越後国上村で「五合庵」という庵を結んで暮らしました。ペンネームが「大愚」

大愚良寛。その生涯についてあまり詳しくは知りませんでしたが、この名は印象深いものでありました。『莊子』から来ていたのだな、と今回初めて知りました。難しい説法は行わずにわかりやすく民衆を教化し、「一日に五合の米があればよい」と、村人にそれ以上の報酬は要求せず、寺も持たずに質素な家で暮らしていたそうです。それで「五合庵」と呼ばれるようになった。

和歌や漢詩、俳句もよくし、書家としても著名でしたが、高名な人物からの揮毫の依頼は断る傾向があり、子どもたちから風になにか書いてとせがまれたときは喜んで応じたそうです。

「天上大風」



文字通り天の上（高いところ）には大風が吹いている、ということとで、子どもたちも喜んで風上げしていたと。良寛は「子供の純真な心こそが誠の仏の心」と捉え、かくれんぼや手毬をついたりしてよく遊んだともいいます（懐には常に手毬を入れていたとか）。

この「天上大風」の風は今でも残っているそうです。良寛自身はことさら解説していないですが、人々はこれに尋常ではない尊さを感じ取って、大事に残したのではないか。



「天」は老子・莊子では道の原理の前提である宇宙そのものを指しています。なので本来その「上」など想定すべきではないのですが、敢えて「雲上」とはせず「天上」と書いたところに良寛なりの「大愚」なイメージ世界があるのでしょう。宇宙を超えた世界は、大いなる風流である。

